

## CNS・CNから学ぶエビデンス

## 看護実践のエビデンスって？

集中ケア認定看護師 妹尾 育美

看護実践のエビデンスは「正常」を目指し行うことではないでしょうか。成長発達、検査値等、ほぼ全ての事象に「値」が示されています。そこから逸脱している事に対し、何かを行うという考えです。認定看護師がこんなこと言うって...怒られるかな？この考えは、ある医師に「全てを正常にしなさい」と言われた事が始まりです。「正常になるようにしか治療をしていない」「異常には理由がある、そこを追求し、治療すれば治癒する」と言われました。

その日以来、私は常に正常に向かって看護をします。正常になれば、楽になり、その人らしい生活を営む始まりになると思います。清潔な環境で、食欲がわき、ぐっすり眠れる看護をします。

ある人が「賢いやつは複雑なことを単純に考える」と言いました。この言葉が私にはしっくりきました。だから常に現場で、「正常」か否かを見極めます。異常値なのに昨日と変化していないから「変わりなし」で何もしないという看護は存在しません。異常値は異常、だから正常にするために、診療の補助に口も手も出し、心地よい生活が営めるよう看護をします。私の考える看護実践のエビデンスは「正常」であることを追求することです。



## 代理意思決定を支援するよりよいコミュニケーションを考える

急性・重症患者看護専門看護師 宮岡 里衣

集中治療室において患者は、意識障害や臓器障害、また鎮静薬の使用などにより意思表示が困難なため、家族は患者に代わって治療についての決定を行う、つまり代理意思決定が求められます。特に終末期における代理意思決定場面では、家族と医療者が医療情報だけでなく、患者や家族の価値観や意向を共有しながら、最善の方針を決定していくことが求められています。

こうした時の医療者と家族のコミュニケーション技法として推奨されているのが、「5 Step Approach (VALUE)」<sup>1)</sup>(表1)です。22ヶ所のICU入室患者家族 126名を対象に、死別後90日目に調査をした結果、「5 Step Approach」を導入した場合、導入しなかった場合と比較し、家族が話している時間、家族が感情表出できた割合、患者や家族の希望が表出できた割合の全てが有意に高く、また不安や抑うつなどの症状を有する割合は有意に低い<sup>2)</sup>という結果でした。

皆さんが患者家族の方々と日々行うコミュニケーションは、「5 Step Approach」に沿った内容も多いと思います。この技法を意識することで、家族の方々へのよりよい看護を考えてみてはいかがでしょうか。

表1 VALUE「5 Step Approach」ICUでの家族とのコミュニケーション技法

V	家族の意向を引き出す (Value family statement)
A	家族の感情を承認する (Acknowledge family emotions)
L	家族の話を傾聴する (Listen to the family)
U	患者を人として尊重する (Understand the patient as a person)
E	家族の質問を引き出す (Elicit family questions)

Curtis JR, White DB. Practical guidance for evidencebased ICU family conferences. Chest 2008;134:835-43.より筆者訳

1) Curtis JR, White DB. Practical guidance for evidencebased ICU family conferences. Chest 2008;134:835-43.

2) Lautrette A, Darmon M, Megarbane B, et al. A Communication Strategy and brochure for relatives of patients dying in the ICU. N Engl J Med 2007;356:469-78.



## 研修報告

## 「研究のプロセスを学ぶ」研修 - 6月期終了 -

今年度は4回を1クールとし、年3回実施します。6月に開催した研修には、当院の職員だけでなく、岡山市立市民病院や倉敷成人病センターなど地域の病院の方々、のべ77名が参加しました。

『文献検索方法』では、事前に参加者から聞き取った日頃気になっている用語を検索してみることで、医中誌をグッと身近に感じることができ、「この用語も気になってたから調べてみよう」という気になります。

『業務改善と研究の違い』『研究計画書/倫理審査申請書の書き方』では、研究を始める前や進めだした時に考えておきたいこと・知っておくことなど、研究の道筋を照らしてくれる研修となっています。

そして、今年度より開催の『研究結果の「正しい」見せ方』は、新医療研究開発センターの三橋利晴助教に講師をお願いしています。例題のグラフや表のどの部分が適切でないのか、どう見せると相手に伝わるのかなどを、まずは自分たちで考えながら研修が進んでいくので楽しくもあり、より理解が深まるとともに研究をまとめる際に大いに活かせる内容でした。



次 回 の 研 修	第1回	10月18日	文献検索方法
	第2回	10月24日	業務改善と研究の違い
	第3回	10月31日	研究計画書/倫理審査申請書の書き方
	第4回	11月8日	研究結果の「正しい」見せ方

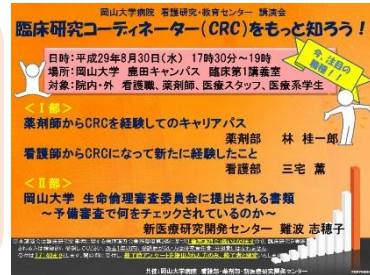


受講希望の方は、研修名・参加希望日・氏名・所属・連絡先を明記し、[ebnkango@cc.okayama-u.ac.jp](mailto:ebnkango@cc.okayama-u.ac.jp)まで送信ください。

8月30日(水)に第1臨床講義室にて開催しました。看護師、薬剤師、検査技師、医師、学生など多職種の43名にご参加いただきました。

2部構成とし、I部は薬剤師の林 桂一郎さんに「薬剤師からCRCを経験してのキャリアパス」、看護師の三宅 薫さんに「看護師からCRCになって新たに経験したこと」と題してお話いただきました。

II部は新医療研究開発センターの難波 志穂子助教に「岡山大学生命倫理審査委員会に提出される書類 ～予備審査で何をチェックされているのか～」と題してお話いただきました。



新医療研究開発センター 難波 志穂子

CRC(Clinical Research Coordinator)という職種について、皆さんはどのようなイメージをもたれているでしょうか。「忙しい」「特殊な技能が必要そうな仕事」「英語ができないと働けない仕事」、いろんなイメージを持たれていることかと思えます。

私たちCRCは、主に治験責任(分担)医師の指示のもとに、医学的判断を伴わない業務や、関わる方々の調整、治験業務全般を支援する役割を担っています。昨今で治験のみならず臨床研究なども支援しています。

実施計画書の確認、治験関連部門との連絡、被験者対応、症例報告書作成、製薬会社からのモニタリング・監査などの対応など、CRCの業務は多岐にわたり多忙です。

一方で、既存治療では効果がなく辛い思いをされていた患者さんが、治験薬を試し症状の改善などの効果が認められたときは大変嬉しく、また自分が担当していた治験薬が厚生労働省から承認を得たことを知る瞬間は格別な感動があります。

もともと看護師、薬剤師、検査技師として働いていた私たちがある日突然CRCとしてうまく立ち回れるようになったわけではなく、治験推進部に配属されGCPなどの関連法規の知識の習得や調整業務に悩んだり、試行錯誤を繰り返して、少しずつ経験を重ねCRCとして成長しています。



新しいチャレンジをしてみたいと思っている方、臨床試験に興味のある方、私たちと一緒に働きませんか？多くの患者さんの明るい未来に貢献している喜び、醍醐味をともに経験しましょう。



大学から学ぶエビデンス

看護のエビデンスと実践を広げていこう！

保健学研究科 成育看護学領域(小児看護学) 小野智美

最近、米国の小児看護の文献を読んでいると、早期の抗菌薬の暴露と子どもの肥満との関連を示す論文に出会うことが多い。それらは、乳幼児への広範囲の抗菌薬の度重なる使用や長期投与が腸内微生物叢を変化させ、子どもの体重増加や肥満のリスクが増加するという内容である。そのため、抗菌薬の適切な使用や管理についての患者・家族教育等、子どもの肥満リスクの減少に向けての看護実践が提案されている。これは、子どもの「3人に1人は肥満」と言われ、30年前に比べて3倍となり、子どもの肥満に影響する要因をコントロールしようと医療従事者は躍起になっているという、米国のお家事情があると思われる。日本では、子どもにアレルギー反応や下痢が起きないといいながら抗菌薬を投与・観察する小児看護師は多いが、その後の子どもの肥満を考えながら、投薬する看護師はほとんどいないと思われる。

健康事情や医療社会への看護職者の敏感さが研究の視点を変化させ、それによって看護のエビデンスと実践が広がっていくのだと痛感する。



Gayle J. Early. Current Evidence Regarding Antibiotic Exposure and Childhood Obesity: An Integrative Review. Pediatric Nursing. 2017; 43(3): 169-174.

Azad MB, et al. Infant antibiotic exposure and the development of childhood overweight and central adiposity. International Journal of Obesity. 2014; 38(10): 1290-8.

1  
案  
内

11月13日～11月22日にミャンマー・ヤンゴン看護大学教員2名が来日されます。  
(岡山大学病院や地域の病院での医療・看護の実際を知り、自国での教育に活かすための研修です)

13日 歓迎会 (研修が始まるにあたり、親睦を図りましょう)

22日 交流会 (ミャンマーでの医療・看護や今回の研修での学びについて語ってもらい、共有しましょう)

送別会 (最終日、楽しいひとときを一緒に過ごしましょう)

皆さまのご参加をお待ちしています



【編集後記】CRCに関する講演会では、CRCの業務が多岐にわたることを知ることができました。参加者の方々も「患者さんの一番身近な存在の看護職だからこそできる心や体のケアに関わっているんだ」と感じた方も多かったです。(馬場 雅子)